

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

2011年度

「学内人権問題研究会」及び「学生人権問題学習会」報告

メタデータ	言語: ja 出版者: 関西外国語大学 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 昌彦 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学人権教育思想研究所
URL	https://kansaigaidai.repo.nii.ac.jp/records/5743

2011年度「学内人権問題研究会」及び 「学生人権問題学習会」報告

(まとめと文・加藤 昌彦)

2011年度は2回の人権問題研究会、そして学生人権問題学習会を開催しました。筆者の及ぶところ報告します。

1. 第21回人権問題研究会

研究会は2011年6月16日(木)中宮学舎の多目的ルームで開催された。中宮学舎・学生相談室で10年間勤務しておられる中村美紀さんにお越し頂き、「学生相談室業務を10年間してきて思うこと」というタイトルで講演をして頂いた。以下にその内容を要約します。

中村さんは10年間の学生相談業務を通して、最近の学生たちの傾向について以下のようにまとめておられた。

①居場所のない学生たち。決まった教室が存在しないこと、ひとり暮らしであること、そして、時間を持って余していること、②人とうまくコミュニケーションがとれない学生たち。社会的要因として、少子化と近所づきあいの希薄化、ひとり遊び、ネット化の進行がある。性格的要因として、人見知り、人目を気にしすぎてしまう、相手の気持ちを考えすぎて、話しかけるのをためらってしまう、友人づきあいの経験が少ないため、共通の話題が見つけれられない、これらの特徴が見られると話された。

気になることは、「時間潰し」としての保健室や相談室の利用があると話された。余った時間をどう過ごしてよいのか分からず、保健室や相談室で話をして過ごすパターンが増えている。また、直接的な要因かは定かではないが、学生が母性的なものを求める傾向にあるのではないかと、中村さんは指摘された。自分の母親には相談できないため、母親のような存在の人に話を聞いてもらいたいと思っているような節がみられる。長期休暇でも実家に帰らない場合もある。近年、「ヴァーチャルフレンド」といった言葉もよく聞

かれるが、ネット上で互いの顔が見えない状況では、うまくコミュニケーションがとれるのに、実際に顔をつき合わせるとそれができない、という現象も大きくなりつつある。

具体的な相談内容については、中村さんがⅠ.心身関連、Ⅱ.生活関連、Ⅲ.学業関連と分類し、それぞれについて詳細に説明された。

Ⅰ. 心身関連。①精神的なものとして。拒食症・過食症に関する相談も少なくはない。その他、高校までのいじめによる対人恐怖症や、父親からの暴力による男性恐怖症に関する相談もある。②身体的なものとして。精神からくる身体的な症状の他に、妊娠や生理不順などについての相談もある。また、ストレスがたまって頭痛症状として現れたり、電車に乗るとパニックを起こしてしまう学生も少なからず見られる。

Ⅱ. 生活関連。①課外活動。この問題で多いのは、アルバイトと部活動に関連するものである。また、部活動をやめたいなどの相談もある。他にも、アルバイトの方が楽しくなってしまう、学業がおろそかになってしまったという相談も毎年ある。②社会問題として、主に新興宗教の勧誘や、架空請求などの問題が増えている。③家庭問題として、特に最近「息子・娘が学校に行けない」と保護者から相談をもちかけられるケースが少なくない。また、家族がうつ病ではないかと心配する学生からの相談もみられる。④人間関係として。主に恋愛・友人関係と、授業・部活・バイト関係とに分けられる。恋愛の場合、「好きな人がいるが告白できない」と背中を押ししてもらいにくるような学生もいる。授業に関連した相談では、「クラスの雰囲気がしんどい」、クラスメートが派手で自分とは合いそうにない、内気な性格からグループワークの時に自分からグループを作ることができない等の相談がある。部活動やアルバイトにおいて、先輩・後輩関係が辛いという相談も多い。逆に部活動の先輩が「後輩が部活の人間関係で、家族との関係で悩んでいるようだ」と相談してくることもある。⑤生活一般として、下宿での騒音トラブルに悩む学生が多く、「うるさくて夜眠れない」と泣きながら訴えてくることもある。また、遠距離通学で時間がとられて辛い、体調が思わしくないなどの相談が、特に新学期開始時期に多い。

Ⅲ. 学業関連。①授業関連として。「授業についていけない」「授業内容がシラバスと違う」などが学期の初めに多くある。中には体調不良で試験の結果が思わしくなかった、或いは受けられなかったことに対する罪悪感を訴える学生もいる。授業のプレゼンテーションで過度に緊張してしまうという相談には、外来の心療内科医への引き継ぎを行う場合もある。また、留学希望者から勉強法の相談や申込書の書き方についての質問を受けることもある。特に春学期に多いのが、「本当は他大学に行きたかった」「学校をやめたい」という相談で、アルバイトとの関係や、本人の意思とは関係なく親から言われて無理やり入学したために、学校生活が辛いというケースがみられる。

②進路関係として。短大生に多いのが編入についての相談で、主に編入のための勉強法などについての相談が多い。帰国留学生からは「海外で働きたい」と相談されることもある。また、卒業後の進路で就職か進学か迷っているという相談もある。③就職に関連する問題では、特に3回生と4回生からの相談が多く、3回生の場合は就職活動に対する不安や、自分の適性などについての相談が多い。卒業年次生では、就職が決まらないことへの不安や、内定が出て自分には仕事が動まるのかという心配を訴える学生が多い。中には精神不安定な状態に陥っているケースもある。

このように様々な相談のある中で、中村さんの統計によれば、心身関連の相談が最も多く、中でも2009年度の心身関連の相談は突出して多かった。その背景は不明であるが、学生を取り巻く環境の変化の影響は大きいだろう。

発達障害の学生について、参加された先生や職員の方々で、いろいろと意見交換や、教育実践が話し合われた。中宮学舎の学生部の方が、ピアサポートという制度について話された。新入生が大学生活に移行できるように、学生ボランティアと共にサポートしている、ピアルームと呼ばれる部屋を、悩み相談やおしゃべりの場として開放している事。また、友達を作ることができずに一人でお弁当を食べる学生のために、ティーパーティーを開き、みんなでお弁当を食べる機会を設けていること。穂谷学舎ではシニアメンターと呼ばれる制度がピアサポートに相当している。一般の学生たちが、自分たちに関連のあることとして関わっていくことが大切だと考えておられる。

その後も、熱心な意見交換がおこなわれ、有意義な研究会を終えた。

2. 第22回人権問題研究会

12月15日（木）午後4時40分より、中宮学舎の本館で、「枚方学事始～古代の渡来人を中心として～」と題して、2011年3月に退職された本学教授の瀬川芳則先生が話して下さった。（中宮の参加者は 人、穂谷 の参加者は 人）以下は瀬川先生のお話の概略です。先生の終始、熱心な話に聞き入り、質問の時間が少なくなりました。私たちの関西外国語大学のある地域の歴史を深く学ばせてもらいました。

<かつての関西外国語大学敷地の様子>

かつての関西外国語大学片鉾学舎の敷地に、小倉東遺跡があります。また、牧野車塚古墳という前方後円墳があり、この古墳と接するようにして外大の敷地がありました。1976（昭和51）年、テニスコート設置に伴う調査が始まりましたが、発見されたのがこの小倉東遺跡でした。発掘調査では、5～6世紀に朝鮮半島から日本に入ってきたという新しいタイプの炊飯用具の韓竈（からかまど）が見つかりました。この竈は四条畷によくある馬飼いの村でもよく見つかっており、同じような渡来系の人たちが、この辺りにも居住していたのではないかと考えられます。

牧野車塚古墳のすぐ近くには赤塚古墳がありましたが、現在は牧野車塚古墳だけが残存しており、全長107メートルくらいの墳丘が国の史跡に指定されています。赤塚古墳については、現在の牧野駅付近にある三浦医院を創立した、江戸時代の文人医師三浦蘭坂の著書により土器などが出土した様子が分かっています。

明治18～22年に作られた、日本初の地形図を見ると、枚方台地を東から西へと流れている川が三本あり、そのうちの一つ、穂谷川は穂谷学舎を通過して、片鉾学舎のそばを流れ、母なる川淀川に注いでいました。

<王仁塚について>

韓国の方が枚方に来られた際、関心を持たれるのが、王仁（わに）塚、そして百済寺跡と百済王神社です。1934（昭和9）年5月30日付の資料によれ

ば、現在の長尾、藤坂のあたりは、北河内郡菅原村といました。その村長が1938（昭和13）年5月11日付で、王仁塚を大阪府史跡名勝天然記念物に指定してほしいと申請しました。その際の添付書類である「王仁墳廟来朝記写し」には、朝鮮の百済から日本にやってきて、日本に文字や儒学を伝えたといい王仁博士について書かれていました。また、この「王仁墳廟来朝記」については、当時の禁野村にあった和田寺の住職で、百済王族の子孫であるという人物が1616（元和2）年に書いたとされています。この資料では、王仁博士が亡くなった折、河内国交野県藤坂村に墓を造って葬ったが、村人が王仁の墓を「オニの墓」と誤って呼んだとされています。

しかし、日本や朝鮮、他の国のどの資料にもそのようなことは書かれておりません。当時の高名な京都の儒学者であった並河五一朗は、「五畿内志」を執筆するにあたり、偶然、和田寺を訪れ、古文書を発見。記述に従って藤坂にある王仁墳らしい石を発見しました。そこでは、村人が、歯痛の時にその石に荒縄をくりつけて歯を治したといます。治癒した後、その縄をほどいてお供えを持ってお礼参りをする、という土俗信仰があり、その習慣を知らずにお供えをする村人を見た並河は、その石を王仁の墓であると考えました。当時、領主因幡守久貝正順は、領地に長尾陣屋を設け、細谷善兵衛を代官としていました。並河は細谷に面会し、王仁の墓が領地内にあることを報告し、細谷は久貝にその旨を報告しました。久貝は「博士王仁之墓」と書いた墓石を作成し、王仁の墓とされた石の前に建立しました。後に有栖川宮に仕える宮侍が、王仁の墓のことを、宮家がかかえる儒学者に相談し、有栖川宮にもっと立派な墓石を立てたいと申請しました。そこで有栖川宮は費用を寄付、「博士王仁墳」と染筆をしてくれました。これにより文政10年（1827）にさらにもう一つ立派な新たな墓石が建立され、藤坂は王仁の墓石が並ぶ府史跡に指定されました。

<忘れられた王仁塚>

ところが、時代が過ぎて1978（昭和53）年8月17日の産経新聞に、当時の東京大学教授がとある記事を寄せました。教授はこの頃、日本人と韓国人の物事の捉え方の違いに関心を持ち、日韓共同でこの問題を研究していました。

教授は、とある会議に参加した際に、韓国の学識ある人々に王仁博士について話したところ、「かつて来日した際に王仁塚へ行ったが、すっかり荒れ果てて見る影もなかった」という話を聞き、帰国後すぐに王仁塚を訪ねました。ところが王仁公園という名前が残るレジャー施設のほんの片隅に、偉大な博士の墓とは到底思えないような場所が残るのみで、非常に落胆されたとのことでした。

時代を遡ると、明治25年の頃、王仁塚を広げようと藤坂村の人々が大阪府に申請しました。村内有志は周囲1500坪の土地を買収し、墓地として大阪府に寄付しました。ところが日清戦争であまり大々的なことはできず、1899(明治32)年になって、仁徳天皇1500年祭が大阪の高津神社で行われた時、附祭として藤坂で王仁塚の祭りを行いました。日韓併合は1910(明治43)年でした。後に1927(昭和2)年、この王仁塚を神社にしたいとの申請があり、大阪府神社の許可を得て、村人は様々準備をしていました。ところが第2次世界大戦終了直前になって、陸軍がその敷地南側隣接地に病院を置きましたが、結局、王仁神社構想はたち消えとなってしまったのでした。

戦争が終わり、この近辺には、当初の村以外の地域からどんどん新しい住人がやってきました。彼らは当初、王仁塚の歴史を知らないでいましたが、後にその重要性を認識するようになり、「王仁塚の環境を守る会」を結成しました。その間に、韓国の大統領から感謝状を贈られるなどし、大阪府も状況を放置できなくなったため、予算をつくり、敷地内に休憩所を設けました。また、韓国でも寄付金を集める者が出はじめ、2006年に王仁塚の入り口に百済門を建立しました。ただし、王仁塚は学術的には根拠がなく、「伝王仁塚」と表記されます。

<枚方の遺跡にみる朝鮮との交流関係>

古代に交野郡と称されたあたりは、8世紀ごろまでは茨田(まった)郡と呼ばれており、現在の門真市や寝屋川市、大阪市の一部から、樟葉の方まで続いていました。

現在は樟葉にはたくさんの住宅が並んでいますが、樟葉駅付近は以前は淀川左岸の湿地帯でした。京阪電鉄が「花と緑と太陽の街、樟葉を作ろう」と

いうスローガンの下に、湿地帯を埋め立て、男山の丘陵地を切り開いて、現在のローズタウンを作りました。大開発の最後に残ったのは1万坪ばかりの楠葉東遺跡でした。ここの調査をした時、大阪の四天王寺や斑鳩の法隆寺を立て始めたころと同じ瓦（同範瓦）が出土しました。また、ここはかつて川岸がすぐそばにあり、淀川に近い所で大量に出土した瓦が、飛鳥時代から安土桃山時代までの瓦であることも分かりました。いろいろな時代の瓦が出るというのは、長期間にわたり営まれた寺があったということですが、その痕跡は見つからず、近くの石清水八幡宮に残る石清水文書に、楠葉弥勒寺という寺が付近のどこかにあったことを述べていました。弥勒と言えば、かつて（古代）朝鮮では弥勒信仰が流行していました。古代百済には益山弥勒寺という大変大きなお寺があります。楠葉弥勒寺は百済からの渡来人が、自分たちの信仰のために建立したのではないかという考えもあります。

京阪電鉄の大造成の後、わずかに残った竹藪を、とある零細建築業者が開発しようと掘り進めたところ、いくつもの登り窯が出土しました。瓦がごろごろ出土し、ここが灰原であったことが分かりました。日本で初めて瓦を焼いた寺は大和の飛鳥寺で、蘇我氏の寺でした。時の権力者であった蘇我馬子建立の寺ですら、見つかった登り窯はたった2基で、聖徳太子ゆかりの法隆寺や四天王寺の周辺からは一つも見つかっていません。そんな登り窯が大阪と京都の境にある瓦窯群でずらりと並んでいます。崇峻天皇の頃に百済から渡来人がやってきて、寺の建築技術を伝えてから、この樟葉の辺りで渡来の瓦博士に指導された瓦作りたちが瓦を作っては、淀川の水運を利用して四天王寺や法隆寺に送っていたのではないかと推測されます。楠葉弥勒寺とは、それらの人々が自分たちの故郷にあった益山弥勒寺を想いつつ建立した寺の名前であったのではないのでしょうか。これらの調査結果から、未だ解明されていない何かの分かりかけているような気がします。

< 質疑応答 >

Q：四天王寺までどうやって瓦を運んだのですか？

A：淀川を使っていました。日本書紀では淀川は北の川、大和川は南の水

と呼ばれ、「川」と「水」の呼称の違いから、北の方が大きかったのではないかと推測されています。北の川をずっと下ると大隈島（大阪市東淀川区）へたどり着き、そこを南へ航路をとってさらに下ると古代の河内湖へ出ます。さらに西側の岸を下ると、現在の京橋、森ノ宮を通過して四天王寺へ入ることができます。または、その岸から長瀬川を遡ると南の水へ入ることができます。そこから東へいくと奈良県へ入ることができます。遣唐使などもこの長瀬川のルートを通って行ったと言われています。長瀬川は、現在の奈良県桜井のあたりまで通っており、そこから遣唐使は馬で飛鳥へ向かったとされています。

<資料の補足説明>

仁徳天皇の時代、天皇は高津宮を上町台地の上に作りました。天皇がここから東を見ると、村や田んぼが見えていました。ところがある時、大雨に見まわれると、そこらの家がすべて浸水し、人々が船で行き来しなければならなくなってしまいました。天皇は河内湖の水を西の海に流すことで事態を解決したといいます。これを難波の堀江といいます。

また、北の川を下る途中には茨田という地があります。そこは「誰やらの工事の跡」とされていて、日本書紀によれば、仁徳天皇の時代、日本で初めて北の川に堤防を築こうとしたところ、何度工事してもどうしても決壊してしまうため、人柱を立てることになりました。二人の人柱が立てられることになったのですが、一人は東国武蔵の国の者、もう一人は河内の茨田の技術者でした。東国の者は泣く泣く犠牲になっていったのですが、河内の者は

「本当に神様がいてそんなお告げをしたというのなら、神様の力を見せてもらいたい。瓢箪は水に浮くものだが、それを沈めてみせてくれたらその力を信じて犠牲になろう」と頓智をきかせ、彼は人柱を免れたそうです。これを衫子断間、この堤防を茨田堤といいます。

かつて守口市で旧1号沿いの大庭というところを調査した時、長い溝が掘ってあり、その底にたくさん土器が張り付いていました。だいたい5世紀ごろのものと判断されます。調査結果から、溝は淀川に向かって傾斜されていて、排水をしながら農業をしていたことが分かりました。通常、灌漑のた

めの溝であることが多いことから、排水のための溝は大変珍しく、画期的でした。

さらに、生駒山の西山麓から、5世紀代の日本で最初の馬の骨が見つかりました。後にJR片町線を複線にする際の発掘調査で、塩を焼くための窯や土器がたくさん見つかりました。この時、焼かれていた塩は馬のためであったと言われていました。当時は馬が貴重で、馬の種類によって塩の量が法令で定められていたほどでした。四条畷では特にたくさんの馬の骨が発掘されており、これも朝鮮半島からもたらされた文化だということが、四条畷市の歴史民俗資料館の資料等からも分かります。

楠葉方面では、継体天皇が北陸からやってきた時、河内馬飼首荒籠に相談したと日本書紀に記されており、この人の支持と情報を得て北陸の大王継体が畿内に入ってきて営んだと伝えられるのが樟葉宮でした。当時は軍事力としての馬をどれだけ持っているかが非常に大切であり、その馬を初期の段階でたくさん飼育していたのが、河内湖のほとりでした。

Q:古代を研究するお立場から、瀬川先生はこの河内の地域が将来どうあってほしいと考えておられますか？

A:難しい問題ですが、日本は朝鮮と深い関わりがあり、古代の歴史について正しい知識を持つことで、自然と差別的な発言、行動はなくなっていくはずです。これから人々の認識がますます深まってほしいと願います。

3. 第4回学生人権問題学習会

学習会は2011年11月24日(木)午後5時より、中宮学舎のマルチメディアホールで200人が集い開催されました。インドのNGO活動家、シェカワット Prahlad Singh Shekhawatさんにお越し頂き、「橋の下の学校 “インド、スラムの子ども達の現状と課題”」と題して講演して頂きました。総合司会は現地へ何度も行かれ、本企画を進めてくださった本学短大部教授の村田美子先生、そして学生司会として、シェカワットさんの主宰する団体が運営する学校を実際に訪れた穂谷学舎3年生の古本舞唯さんと、神戸大学大学院の草野健三さんにお手伝いを頂き、現地での体験をお話し頂きました。

<ビデオ「橋の下の学校」>

シェカワットさんが運営しておられる、ラジャスターン州ジャイプルの学校で、古本さんと草野さんが行った授業の様子がビデオ上映された。紙芝居で日本の紹介をしたり、「ねずみの嫁入り」をヒンディー語で聞かせたりしながら、スラム地区の子どもたちと交流する様子を通して、子どもたちの現状が説明された。

<シェカワットさんのお話>

●ラジャスターン州におけるスラム居住者の増加

ラジャスターン州のスラム街居住人口が増加している。その背景には、主に二つの問題があげられる。まず、近年、水の汲み上げ過ぎによる枯渇問題が深刻化していること。さらに、人口増加に伴って雇用機会が制限され、大都市への出稼ぎが急増していること。インド最大の都市ムンバイの人口は2200万人で、そのうちの45～48%がスラムに居住しているとされる。また、ラジャスターン州の州都ジャイプルにおいても、人口の15～20%がスラム居住者だと言われ、これらの問題の被害を最も受けているのが子どもたちである。

●カースト制と子供たち

インドでは、カースト制度の身分制があり、職業や結婚に大きく影響している。また、ダリット（抑圧された人々）と呼ばれる、一番抑圧されているカーストのなかでもより低い階級が存在し、スラム居住者のほとんどはこのダリットである。インドの最貧困層を形成している。

シェカワットさんは、これらの最貧困層に属する子どもたちを対象にした学校をジャイプルに4つ作られた。学校に来る子どもたちは、10歳前後で普段は靴磨きやプラスチックの収集などの労働に従事しながら家計を担っている。家庭では両親や家族から労働を強制されるなどひどい待遇を受けている。そしてダリットに属することで社会からも疎外され、子どもたちは自尊心を失ってしまっている。シェカワットさんはご自身の作られた学校で子どもに教育をし、遊びの場を提供することで、子どもたちが楽しみを感じられるように努めておられる。政府によれば、インドでは1500万人の子供たちが労働

に従事していると言われるが、政府の調査結果は信憑性が低い。ILOの調査では、労働に従事する子どもたちの数は6000万人にもものぼるといわれ、これは世界で最も多い。このような児童労働のサイクルを断つためには、大人たちに職業訓練を行うことも必要である。

●子どもたちの置かれている現状

インド政府によれば、1000人に90人の割合で5歳未満の幼児が、感染症や栄養不足によって死亡、また、出産後の母親の死亡率が世界一で、毎年10万人以上が死亡している。さらに、インドの人口の48%が栄養失調に苦しんでいるといわれ、その半分が子どもである。比率の上ではアフリカも児童労働、栄養不足、衛生面や子供の死亡率が大きな問題とされるが、インドは人口が多いため、絶対数としてはインドが世界一となっている。加えて、インド社会では、基本的に男児が望まれ、妊娠時に検査等で女児だと判明した場合、墮胎するケースが多い。そのため、インドの子どもたちの男女比率は男児1000人に対して女児869人となっており、墮胎がなければ2年間で100万人の女児が生まれていたとされる。

シェカワットさんは、現在「子どもの権利プロジェクト」に取り組んでおり、スラム街における子どもたちの支援のみならず、NGOや社会組織同士で連携し、政府に対して体制変革を求めて働きかけている。

●インドの経済発展とその問題

近年のインドの経済成長は目覚ましく、成長率は中国に次いで世界2位。いわゆる富裕層の数は2年ごとに倍増している。しかし、この急速な経済成長の陰では、多くの貧しい人々が、発展の勢いから取り残されている現実があり、経済成長が一方では教育の不平等や貧困をもたらしている。このような現象の要因の一つには、「下位のカーストに生まれてきたならば、それはカルマのせいであり、運命だ」というインドの伝統的な文化的価値観がある。また、インドには未だ先進的な法が整備されておらず、賄賂が横行していることも理由にあげられる。シェカワットさんは、インド社会全体が思いやりに欠け、階層主義的構造が蔓延していることが問題だという。収賄によって現行の法はほとんど形骸化状態となり、教師はダリットのいる学校には来な

かったり、又はほんのわずかな時間しか勤務しないということが頻発している。現在、インドの国家予算のうち、教育に充てられているのは、GDPのわずか2%ほどでしかなく、世界の標準が3～5%であることを踏まえれば事態は深刻である。NGO団体は少なくともGDPの9%は貧困層の子どもたちのために予算を組むべきだと訴えているが、国は国連に参加しているにも関わらず、NGOの子どもの権利に関する進言には真剣に取り組んでいない。

一方で、ポジティブな面を見てみれば、教育や雇用など様々な権利に関する小さな運動が、一つの大きな社会運動となってきており、政府がこれらの権利についてどれだけの資金を投じたかを情報開示するようになった。また、Watch Doc Communityといて、村単位で住民自らが、教師が学校に来ているか、病院に医者がきちんといるか等を監視する体制も敷かれている。さらに、政府が人々に最低100日間の雇用を保証する制度もできた。しかしこれらは、人々が貧困から抜け出して、子どもを労働から解放するにはまだまだ不十分である。

●「思いやる」ということ

シェカワットさんがこのような運動に取り組む理由は種々あるが、まずは貧困社会に生きる人々たちへの思いやりの気持ちである。グライ・ラマが「他に対して助けたいと思う気持ちを啓発する」ということについてよく話しているが、私たちは相互依存している存在であるのだから、お互いに思いやるのはごく自然なことである。私たちはみな、一つの人間としての集合体を成しているのであって、国境に捉われずに各地の貧困や紛争などの問題に対処していかなければならない。また、他を助け、他に与えることは、人生により大きな意味を持たせてくれる。自分自身や家族よりも、他を助けようとするだけで、人生においてより大きな目的を持つことができる。これは、近年ポジティブ心理学の分野でも主張されている。また、進化心理学においても、猿などの霊長類には、助け合い、思い合うことが必要であり、人類の進化の過程において重要な役割を果たしたことが分かっている。私たちが誰かを助けようとするのは、私たちが何か特別な存在であるからではない。最低限の生活を送りたいと思うのは、全ての人間の権利だからである。マハトマ・ガン

ジーは、困難にある人々を助けることは、神への奉仕につながると言った。また、アメリカのジョン・ローズという哲学者は、貧しい子供たちや貧しい家族の立場に立って、自分ならどのように扱ってほしいかを考えるよう提唱している。このゴールデンルールは、聖書の「人にしてもらいたいと思うことを人にもしなさい」という教えに基づいている。この言葉は新約聖書の言葉ではあるが、どの宗教、文化にも同じ教えが存在しており、普遍的なものである。もし世界が平等であったならば、抑圧される人々は少なくなり、人々の幸福度も上がる。多くの調査結果で、デンマークは世界で一番平等で幸せな国だと言われているが、デンマークにおける調査では、公平さと富があるほど、幸福度も上がるという結果が報告されている。

困難にある人々を助けようと思うとき、その動機づけはたくさんある。また、世界中には助けを必要とする貧困層の人々もたくさんいる。最も怖いものは無関心である。

●PeAce And Justice EducAtion

講演の前日シェカワットさんは、日本でテロ組織のメンバーが爆弾テロを起こしたというニュースをご覧になり、そのメンバーがみな高学歴であったということに関心を持たれた。日本のような平和な国家で、なぜ高学歴の人たちが間違った判断を下すのか。ここで私たちが問わなければならないことは、教育の質である。教育は私たちの正しい判断を助けるものであり、どのようなカリキュラムで、どのような教授法で教育がなされるのかというのは、非常に重要である。なにもこれは日本に限ったことではない。インドでは多くのテロリストが活動しているし、イスラム教原理主義の武闘派は世界中で爆破を繰り返している。かつてアメリカでジェームズ・ジョーンズという集団を組織した人物が、信者に死を命じ、大量自殺を引き起こすという事件が起こった。このように、周囲の発言が人の行動に大きな影響を与えることがある。私たちが自分自身で、何が正しくて何が正しくないかを正確に判断できるように、また、権力を持つ人たちの言いなりになってしまわないように、教育者たちは常に問いかけ、生徒に考えさせなければいけない。近年インドではグル（導師？）が問題となっており、グルの中には「女兒や処女の命を

神に捧げれば、繁栄がもたらされる」と説く者がおり、実際にそれらのグルを一方的に信仰する人たちは、自分たちの幼い娘を殺してしまう。批判的思考を持ち、常に内省することは、自分自身で何が正しいのかを考え、判断するためだけでなく、知識をきちんと使い、賢く行動するためにとっても重要である。情報や知識を得ることで分別がつくようになり、その思慮深さによって、どうすれば価値ある人生を「良く生きられるか」を考えることができる。

<質疑応答・コメント>

●古本さんの体験談

ビデオや資料などを見る限りでは、「インドの子どもたちは可哀そう」というイメージがどうしても先立ってしまうが、現地では橋の下の学校で子どもたちが、日々の学習に意欲を持って取り組んでおり、勉強できることが当たり前になっている日本の現状との差に驚かされると同時に、「学ぶ」ということの本質を目の当たりにした。研修に行ったジャイプルの学校の子どもたちは、授業に来ない時には、物乞いをしたり、労働させられたりしているのだが、学校の中では子どもらしい表情で、勉強に励んでいたという。しかし、学校に行く機会すら与えられない子どもたちは、金銭の代わりにお菓子などを差し出しても、ただただお金を要求するなど、子どもらしい姿を失っている場合も多く、学校に行ける子どもと行けない子どもとの間にも違いがあると感じた。

●フィリピンを旅行した学生

物乞いをしている子供に遭遇した時、最初はただ驚いたが、子供の真剣な目にお金を差し出しそうになった。スタディツアーでの出来事だったため、付添いの人からお金を与えないように言われ、仕方なくその場を立ち去った。

●インドに滞在した学生

同じように物乞いの子供たちには金銭を与えないよう言われていたため、そばに寄ってきてでも無視していた。しかし、しばらく経つと、子供たちが自分に向かって手を振っているのに気づいた。一緒になって遊んでみて、子供たちが実際に欲しているものは金銭ではなく、愛情ではないかと考えるようになった。

●インドの人権教育について

Q：インドでは一般的にローカーストに対する蔑視があるが、私立の学校教育では「人権教育」がカリキュラムに組み込まれていないのか？

A：私立の学校にも様々なタイプがあり、中には人権教育を取り入れるところもあるようだが、現在のローカースト蔑視の裏には、家庭での教育が大きく影響している。問題の改善には、家庭、特に母親を教育するところから始める必要がある。

Q：コルカタ（カルカッタ）駅の8番プラットホームに、橋の下の学校によく似た形態の学校があるという新聞記事がかつて出ていたが、まだこの学校が存続しているのか？またシェカワットさんの団体とこの学校は何か関係があるのか？

A：シェカワットさんも昔その学校について耳にされたことはあるが、関連はない。

●不可触民とは？

Q：シェカワットさんの運営する4つの学校のうち2つがscheduled casteのための学校だと書かれているが、具体的にscheduledとはどういう意味なのか？

A：scheduled casteという用語は、政府によって用いられ、蔑視、抑圧されている被差別カーストの人々を指している。Scheduledと呼ぶ理由は、インドの法律用語で「指定された」という意味である。

●ムスリムのスラムの子どもたち

ヒンドゥー教徒のみならず、ムスリムのスラムも存在し、シェカワットさんはそこに暮らす子どもたちを対象にした学校も開いている。ムスリムの女兒は、自分たちのコミュニティの外に出て勉強することができないため、勉強する場所は、自分の家などに限られるが、一人のムスリムの少女を教育すれば、それがその家族にも行き渡ることになり、学校に来られないし来たがらないからと言って、教育を諦めてはいけない、と強調された。

●スラムの学校について

Q：スラムの子どもたちの支援を始めようとした時、シェカワットさんは

どのようにしてそれらの子どもたちやその家族を集めたのか？また、シェカワットさんが支援しておられる学校には、どれくらいの教員が働いているのか？

A：スラムを訪れる場合、子どもたちの両親、特に父親に対して、教育の価値を説明し納得させるのが最も難しい。また、子どもたちはどうしても働きにいかねばならず、そうでなければ家族は生活できないため、丸一日、授業を開講することも難しくなり、授業は短い時間に限られてしまう。学校では、彼らが稼いだお金を、父親ではなく母親に渡すように指導しなければならない。母親は受け取ったお金を生活に使うが、多くの父親は酒を飲むので、父親の酒代に稼ぎをとられることがよくあるからである。学校では、4人の教師に対して1人のコーディネーターがおり、シェカワットさんはその監督となって働いておられる。

●カースト制度について

Q：インドの憲法では人は皆平等であるとされるが、カースト制度はインド社会に深く根付いている。カースト制度について、近年どれほどの改善がみられたのか？

A：憲法上、人は皆平等であるとされているが、実際はそうではない。特に村単位ではカースト制は強い力を持っていて、人々の精神的な部分に根強く残っている。それを完全に消し去るのは難しい。近年では、カーストに基づいた政党もできてくるなど、カーストは最早、単に差別・被差別問題のもとではなく、社会的アイデンティティーを示すものとなりつつある。人々は、自分たちは他の人々と同じではないと考えがっていて、これが統一の妨げになっている。ローカーストの子供たちが差別される理由は多々ある。主なものの一つは、彼らが貧しいこと。また、スラムという違法地帯に住んでいること。さらに、女性であることなどのジェンダーによるものなど、ローカーストの中には、いくつもジャーティーがある。

●スラムでの教育

Q：シェカワットさんの学校の活動における成功例を示してほしい。

A：ある子どもは、親からの理解を得られたことで、学校に定期的に登校

できるようになり、初等教育を終えて、通常の学校へ通えるようになった。そのために、シェカワットさんの団体は、制服や通学手段に関する費用をサポートしたりしている。大切なことは、子どもたちに、家庭や通常の生活ではできない楽しさを与えてやることである。学校に来たばかりの頃は、授業が始まっても走り回っている子どもたちだが、名前を書くことから始め、それができた時には、恥ずかしい気がしながらも、誇らしそうにしている。そのうちに、学ぶということが楽しくなり、学校で友達と遊ぶことが楽しみになり、学校へ定期的に来られるようになれば、公立や私立の学校に行くこともできるようになる。

●男尊女卑

Q：インドでは男尊女卑がひどく、女性の割合が少ないが、女性はどのような職に就けるのか？また、女性の人口に占める割合が少ない中で、女性の教育者は足りているのか？

A：シェカワットさんの団体が子どもたちに行なった調査によれば、女兒は教師、美容師や医者になりたいという希望が多かった。ちなみに男児の場合は、大きな権力を持っていて強いイメージの警察官という意見が圧倒的に多かった。しかし実際、両親は女兒に期待しないことの方が多い。女の子が12、3歳になると結婚させてしまう。ラジャスターン州にはまだ古いしきたりが残っていて、5,6歳になると女の子は結婚させられ、子どもが生める体になるまで親元で暮らした後、12,3歳で結婚相手の家に移るという児童婚が今でも行われている。

シェカワットさんの学校では、全ての教員が女性である。子どもたちは男性よりも女性教員の方が安心して学校に来られる。そうすることで、より多くの女兒が学校に来られるようにしている。また、女性のおかれている環境についてのグループがあるので、その学校の先生たちがグループにも参加している。

●衛生問題について

Q：インドでは栄養失調の人が多いというお話があったが、子どもたちの栄養状態について、階級や性別によって栄養状態に違いがあるのか？

A：カーストの面から言えば、貧しい子どものほとんどがローカーストに属している。性別の面では、通常、食事は男性と息子に最初に配られる。娘は母親の手伝いをさせられる。なぜなら、娘は最終的に他の家に嫁ぐ上、嫁ぐ時かなりの持参金を持たせなければならないため、息子の方が可愛がられる傾向がある。

Q：一般的に世界では女性の方が長生きするが、インドではケララ州とタミルナドゥ州を除いては女性が早く亡くなる。その原因は栄養失調が大きい。誰がどのカーストに属しているかをどうやって見分けているのか。

→小さな村では、コミュニティが小さいため、名前や出身地によってすぐに分かってしまう。大都市ではより難しくなるが、例えばトイレ掃除などの職は被差別カーストのみがやる仕事であるし、苗字を聞けば分かるようになっている。インドでは、初めて会った時に、名前、出身地、カーストを尋ねるため、大都市であっても相手の属するカーストがすぐに分かる。

質疑や意見は引きもきらず、6時半の予定時間を越えた。参加者は非常に多くのことを学べた。シェカワットさんに感謝し、村田先生・古本さん・草野さんに感謝して会を閉じた。